

## 佐々木英明

音響会社で働き 社長

ユーザーにとって有益な真空管情報をはじめ公平に提供することで、次世代へ真空管というものを伝えてゆきたいと思います。

真空管アンプは、真空管の交換でサウンドが変わることをギタリストなら誰でも知っている。しかし、真空管は豊富な種類があり、高圧電流を使用するため、専門的な知識を必要とする。真空管に特化したWEBサイトVintage Sound(<http://www.vintagesound.jp/>)は、真空管選びのコツやバイアス調整の方法などを伝授。さらに426種類(3月31日現在)もの真空管の聴き比べが可能な。Vintage Soundを運営している音響会社ささき代表、佐々木英明氏とサイトの協力者でレコーディングエンジニアのDr.Subsonic(藤原 敬)氏に真空管とその聴き比べサイトの内容について話を聞いた。

Vintage Soundは真空管の専門店ですが、佐々木さんご自身のプロフィールとショップをインターネットで展開することを考えたきっかけは?

技術系の買書者としては第1級陸上無線技術士、電気通信主任技術者、電気主任技術者という横っからのエンジニアで、キャリアとしては(株)リクルートでネットワークエンジニア、その後は特許業界で電気系の特許を担当するパテントエンジニアを経て、1998年に合資会社ささきを創業し今年で13年目となります。

そもそも弊社が真空管業界に参入した理由は、あまりにも真逆な日本の真空管事情があったからです。つまり、真空管業界は真空管をブラックボックス化して販売することをよしとする癖が多い業界でもあります。ユーザーに対する情報開示が圧倒的に不足しており、それが真空管を謎のベールに包んで多くの都市伝説を産みだした原因となっており、それは現在でも変わっていません。一方、海外に目を向けると、古いときを慕う真空管が一つの文化にまで昇華され、真空管に関する豊富な情報がユーザーに提供される環境が整っており、ユーザーは確かな目を持って真空管をチョイスすることができます。

残念ながら日本にはそのような環境は無く、真空管については確信と賞賛を伴わず。このような背景があって、ユーザーにとって有益な真空管情報を惜しみなく公平に提供することで、次世代へ真空管というものを伝えていきたいという思いがあり、情報公開と同時に優れた営業媒体としてインターネット展開という結論に至った次第です。

このサイトのコンテンツの主な内容について教えてください。

かなり制約的なタイトルもありますが(笑)、登られている真空管の都市伝説を解体する「間違いない真空管選び」、アンプ初心者から必ず読むバイアス調整を徹底的に解説した「バイアス調整の解説」、バイアス調整代をゼロ円にするための「バイアスフリー倶楽部(特許出願中)」、文系向けに判りやすく解説した「はじめての真空管」、ギ

タリストの関心が高いサウンド改善に関する「アンプのアップグレード方法」、お客様の希望サウンドを叶える「フルオーダーメイドの真空管セレクト」、そしてなんと置いても一番の自玉は、「真空管の聴き比べ SOUND BAR」です。この「真空管の聴き比べ」は、プリ管とパワー管とのブランド毎の組み合わせをCDレベルの高品質(WAV)で試聴でき、真空管選びのデファクトスタンダードとなるポテンシャルを持ったカラーコンテンツと自負しております。このコンテンツは創業時から全額でしたが、制作環境が変わらず時が経ってゆきました。

ところが2008年に幸いにもギタリスト兼レコーディングエンジニアのDr.Subsonic(藤原 敬)氏との出会いにより、急脚がプロジェクトとして一気に動き出し、1年間の制作期間を経て16年越しの思いがようやく実現しました。

Dr.Subsonic氏は、レコーディングエンジニア、プログラマー、コンポーザーとして多彩なカテゴリで活動されておりますが、「真空管の聴き比べ」では、音楽制作から評価までの全てを担当していただいております。

真空管の聴き比べ(SOUND BAR)についてですが、すごい数ですね。この聴き比べコンテンツで、確認できる内容は単にサウンドだけではなくありませんよね?

はい。現在はパワー管EL34系の組み合わせ第一弾として426種類を公開しており、追加分として247曲を4月中に公開予定です。今後はKT88系(506種類)、6L6系(640種類)、6V6系(192種類)、7027系(64種類)を順次制作予定で、多言語化による海外展開も視野に入れております。

これらの聴き比べコンテンツでは、クリーンおよび歪みサウンドをストリーミングによりPCで試聴できることはもとより、客観性を担保すべく、私ではなくDr.Subsonic氏が評価をしていることがポイントです。つまり私が評価してしまおうと真空管としての売れない理が無意味に働く恐れがあるからです。

具体的な評価内容としては、クリーン音色・歪み音色・サステイン・解像度・

ダイナミックレンジおよび明瞭度を5段階で数値化したレーダーチャートと、数値化できない要素の随時です。

Dr.Subsonic氏にはあくまでユーザー目線での評価をお願いしていることから激評評価も多数あり、いわゆる褒め評価とは別異であることがおわかりいただけると思います。

レコーディングエンジニアのDr.Subsonicさんにご質問ですが、このレコーディングの方法(例えば使用しているアンプやマイクなどのレコーディング環境など)について教えてください。

今回のレコーディングは、現在公開中の426曲ではギターはIbanez SZ(6弦)、RG(5弦)、ギターアンプがDiezel VH4、キャビネットはMesa Boogie Roadking Cab 12x2、Marshall 19EQA、それに、DAWソフトがApple Logic Pro、Waves、AD/DAがApogee Rosetta 800、その他にはREAMP、SPL Transducer、Kojia Areyなどを使用しました。

一つのパターンを製作するにあたり、聴き比べという趣旨を考慮し、常に同じ条件での録音が不可欠になりますのでREAMP方式を採用しています。また、一般的な録音の際、キャビネットを隔らしてマイクで拾いますが、上記の条件を満たすためダイアロード搭載で出音に癖の少ないコンパクトスピーカー・マイクシミュレーターを使用しています。この録音方法の利点としては、録音時の環境にあまり左右される事がなく、すし、アナログ段での録音機器や外部からの混入ノイズによる脚色も最小限に抑えられます。勿論、上記のキャビネットと制作用モニターからの出音の相性合わせは可能な限り行っています。

今後公開されるEL34追加分247曲と現在製作中の6V6系/KT88の組み合わせでは、更なる音質向上と安定性確保のためDAWソフトにSteinberg Nuendo、RNDigital、AD/DA、ClockがGrace Design m201ADC、m904改。ほかにKojia Arey Mark2、Groundrite Co. Soundrite (Proto) etc...の追加と変更を行いました。REAMP時の標準データやギターアンプ周辺機材の変更は特に



ありません。上記の機器導入後は解像度や情報量が格段に上がったので、組み合わせ毎の違いが更にわかり易くなっていると思います。

読者の方に真空管交換のためのコツなどがあれば教えてください。

一言で言うと、真空管の寿命と最適な組み合わせを知る事です。ギターアンプの場合、真空管の寿命は平均1年といわれておりますので、このタイミングで全真空管を交換することができます。よくある失敗例は、パワー管だけ交換してプリ管は古いままという状況です。これでは、古いプリ管がサウンドの足を引っ張ってしまいます。折角パワー管に投資しても、サウンドクオリティは上がりません。

またギターサウンドは、プリ管とパワー管との組み合わせにより大きく変化しますので、同管の組み合わせが重要となります。一般の方々ですとこの組み合わせを覚めることが困難ですので、真空管の専門家を賢く利用することが理想の音作りへの第一歩といえます。弊社では、「真空管聴き比べ」や豊富なコンサルティング実績に基づいて、朝10時から夜10時まで無料相談(TEL:020-194-380)を受け付けております。また、真空管交換で悩むには通れないバイアス調整に関しては、これを不要とする「バイアスフリー倶楽部」という独自サービスも無料で提供しております。



Vintage Soundの協力者でレコーディングエンジニアのDr.Subsonic(藤原 敬)氏

聴き比べ

色調追加

Dr.Subsonicの選

クリーンでは、やや前になる遅いマイルドな音。歪ませると、ややトランジェント、低音が豊富。ミュート奏法には、やはりノイズっぽい。

サイト内コンテンツ「真空管聴き比べSOUND BAR」では、真空管ごとのチャーチン評価や随時性の他、実際のサウンドの試聴もできる。